

序論——本書の内容と構成について……………1

第一章 中世往生伝研究の沿革とその問題点

第一節 中世往生伝研究の沿革とその問題点……………11
第二節 埋もれた如意宝珠——中世往生伝の非有説をめぐって……………41

第二章 中世往生伝の形成と法然浄土教団

第一節 迦才『浄土論』と中世往生伝類——本朝における往生伝の作品認識をめぐって……………57
第二節 往生伝の系譜と無観称名義——中世往生伝と『明義進行集』……………75
第三節 賀古の教信話考——『明義進行集』の教信話をめぐって……………100
第四節 往生伝の中世的変容——法然門における往生伝の形成をめぐって……………118
第五節 中世における法然門の宣教活動と往生伝の形成……………136
——中世往生伝の編纂時期をめぐって——

第六節 『一言芳談』の基礎的研究——主に神明靈験譚と編纂意識との関連をめぐって……………158

【補論】

第三章 往生譚と絵解き——念仏山教信寺蔵「開山上人一生絵」をめぐる——	
第一節 念仏山教信寺蔵「開山上人一生絵」をめぐる—— ——土佐光信作画説への一、二の疑問——	187
第二節 念仏山教信寺蔵「開山上人一生絵」の絵解きについて ——「播州念仏山教信寺縁起」と絵解き教信上人伝—— 付・教信話の中世的展開	204
第三節 「播州加古郡念佛山教信寺畧縁起」——翻刻と研究——	232
第四章 中世往生伝の周縁——日蓮・西行——	
第一節 鎌倉新仏教開祖の女性観——絶対平等の思想と女人救済——	245
第二節 西行と文覚——歌僧頓阿の眼に映った両者の邂逅——	257
おわりに……	267
あとがき……	271
初出一覧……	277
索引（書名等・人名・研究者名）……	左1

序論——本書の内容と構成について——

本書は、『中世往生伝の形成と法然浄土教団』の題名が示すとおり、法然浄土門葉の緇流の徒が、いかなる思想のもとに宗祖滅後の往生話群を創出し、中世往生伝（類）を形成していったかを推察した論考を中心に据えている（第一章第二節及び第二章）。また、平安期の往生譚の話柄を継承しながらも、法然門で創出された宗派性の強い話題を組み入れた念仏往生譚の絵解きが、一地方寺院において、江戸時代から現在に至るまで口演され続けている事実を様々な角度から考究し、絵解きの場を通して変容してきた往生譚の歴史的・現代的な意味合いをも考えてみた（第三章）。

本朝の歴史における宗教思想の一大変転期であった中世という時代は、

死期はついでを待たず。死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つこと、しかも急ならざるに、覚えずして来る。

〔徒然草〕第一五五段

世間出世至極たゞ死の一事也。死なば死ねとだに存ずれば、一切に大事はなきなり。この身を愛し、命を惜しむより、一切のさはりはおこることなり。あやまりて死なむは、よろこびとだに存ずれば、なに事もやすくおぼゆる也。しからば、我も人も、真実に後世をたすからむとおもはんには、かへすぐも、道理をつよくたゞて心にまけず、生死界の事を、ものがましくおもふべからざるなり。

〔一言芳談〕第四十一条

聖光上人云、「八万法門は死の一字を説く。然ば則、死を忘れざれば、八万法門を自然に心得たるものにてある也」。

〔一言芳談〕第七十四条

という言辞に象徴されるように、迫り来る「死」をいかにして受け入れるかという命題、翻つて、いかにして「死」を超越するかという命題を担われた時代でもあった。兼好が心惹かれたであろう「昔ありける聖は、人來たりて自他の要事をいふ時、答へて言はく、今、火急の事ありて、既に朝夕にせまれりとして、耳をふたぎて念仏して、つひに往生を遂げけり」〔徒然草〕第四十九段〕という、永観の『往生拾因』に掲された逸話などは、中世という時代の胎動を感じさせると同時に、識者兼好をして「往生」が特別の関心事であつたことをも窺わせる。このような時代にあつて、鎌倉新仏教の先達であつた法然房源空は、善導浄土教の法燈を継承しながらも、末代の衆生の「死」に初めて自覚的な意味付けを与えた人物であつたと言えよう。

法然が生涯持ち続けたであろう天台僧としての自覚と思想については、本書第二章第五節で指摘したので、ここでの再説は控えるが、示寂後に浄土一宗の偉大な祖師として敬慕尊崇された「専修念仏者法然上人」は、その実、自らが聖衆の來迎に与るまで門徒たちの邪正に苦しんだ人物でもあつた。末法濁世の凡夫を救済する唯一絶對の往生行として専修念仏を提唱した法然の、

一念十念にて往生すといへばとて、念仏を疎相に申ば、信が行をさまたぐるなり。念々不捨者といへばとて、一念十念を不定におもふは、行が信を妨也。信をば一念に生を取て、行をば一形にはげむべし。

〔一言芳談〕第二十七条

数遍をかきぬるは一念の往生をうたがふ也。行業をいへば、一念十念にたりぬべし。かるがゆへに数遍をつむべからず。
(「登山状」)

といった言葉は、法然の教学を理論的に解釈し得なかつた多くの(末端の)浄土門徒たちを思想的混乱に陥らせたと思像される。他宗から強激な弾圧を受けるまでに急速に弘まった専修念仏は、直截簡明で純一な教義である反面、法然自身の宗教活動との間に矛盾を感じさせる教えでもあった。法然の上足たちの示寂後には、宗祖の信仰の真諦を理解し得ない浄土門徒の増加に拍車がかかり、宗派存亡の危機的状况を招くまでになった。そこで、揺るぎない専修念仏信仰に生きた祖師の伝記や、専修念仏信仰による往生譚・往生伝の形成が必要とされたのであろう(第二章第四節・第五節)。また、そうして創出された祖師伝や往生譚・往生伝を布教や唱導の具として用いることは、浄土宗の教線拡張や宣教活動に資することになった。このような視点から法然門で形成された往生譚や往生伝に着目した時、そこに、これまで見えてこなかった中世往生伝成立の新たな要因を見出すことができると思うのである。

第二章第六節には、法然浄土門における往生伝編纂の背景を究明する一助として、『一言芳談』の冒頭三条の排列と内容から、同書の編纂意識の一端を探ろうとした論考を収めた。法然浄土教の影響下に成立した念仏聖の箴言集と覚しき『一言芳談』は、中世往生伝類と話の供給圏を共有する資料であり、「当然往生伝的な系譜が考えられる」(大隅和雄、本書第一章第一節参照)作品である。兼好が『徒然草』に引用したことも有名なこの草子は、中世仏教の思想や実態を知る上で極めて有益な資料であり、兼好を魅了した法語の数々は、現代を生きる我々の心をも惹きつけて止まない。しかし、その雑纂的な内容や記述形態によってか、『一言芳談』の作品研究は遅々

として進まない。本書の内容に引き寄せて述べるならば、同草子の作品研究を進めることは、中世往生伝類の体系的な把握と実態究明とに寄与するものが少なくないと考える。『一言芳談』の作品研究は、今後、早急に取り組むべき課題の一つとなるう。

第二章では、法然浄土教団によって形成された中世往生伝及び中世往生伝類の諸相と作品構造との解析を試みた。その第三節に掲載した「賀古の教信話考——『明義進行集』の教信話をめぐって——」は、法然門の縉流の徒が、選択本願念仏義に則って沙弥教信の往生譚を潤色・改変したことを考究した論考である。

口称念仏専心による本朝での最初期の極楽往生者沙弥教信は、永観や親鸞・一遍をはじめとする念仏者に崇敬された人物として、後世に永くその名を残している。その沙弥教信の庵の跡に建立されたと伝えられる寺院が念仏山教信寺である。同寺には、「開山上人一生絵」と題された二幅の絵軸がじくがあり、江戸時代以降、絵解きの場を通して開基教信上人の霊徳を讃えてきた。「開山上人一生絵」の絵相の原拠には、永観の『往生拾因』や教信寺の縁起類が据えられ、そこに中世以降の播磨の古伝承などが組み込まれるかたちで絵解き語りが継承されてきたのである。

絵解きの語りでは、沙弥教信を霊徳の聖「教信上人」へと変貌させるのだが、その語りの内容には、中世に法然門の縉流の徒が創出した話題が組み込まれている。全国各地に残されている掛幅絵伝や、『法然上人行状絵図』に代表される法然の諸絵伝がそうであったように、絵画を用いての教化活動は、人々の信仰心と寺勢昂揚のための有効かつ常套的な方策であった。「開山上人一生絵」の場合は、教信上人の往生譚を絵相化したものであるから、いわば、絵画化された往生伝と考えて差し支えないだろう。

教信寺の一寺に限ったことではないが、絵解きの場合は、絵解きされる物語によって寺社の霊威・霊験を増幅さ

せながら、話が再構築・再生産される動態空間でもあった。教信寺の場合は、専修念仏の法燈に繋がる口称念仏専心の往生者教信上人を祀っており、絵解きの中では、鎌倉時代の法然門葉で創出された話題が語られるのであるから、「開山上人一生絵」の絵解きは、絵解き(中世)往生伝とも考えられるのである。第三章では、同寺の絵解きを通して伝承されてきた沙弥教信(教信上人)の往生譚を、歴史的視点から多角的に捉えるために、絵軸制作の由縁(第一節)・絵軸に描かれた絵相と絵解きの内容(第二節)・同寺の「畧縁起」と絵解きとの関連(第三節)を考察した三編の論考を掲げた。また、本朝における往生伝編纂の歴史の過程で、沙弥教信話(勝如話)の初出である『日本往生極楽記』から、鎌倉期の法然浄土門で創出された『明義進修集』掲載の教信話(絵解きで語られる、教信の隠棲前の法歴などを記した往生譚)までの話の変遷を概説した小考を付した(第二節末)。

第四章には、日蓮及び鎌倉新仏教開祖の女人成仏往生論と祖師伝の形成を考察した小論(第一節)、頓阿の『井蛙抄』に掲載された西行と文覚の邂逅譚から、伝説化されていく西行像・文覚像の形成を考えた小論(第二節)の二編を取めた。これらの論考は、少なからず中世往生伝や祖師伝・僧伝の形成に関係すると思われる。各編には、筆者なりの今後の研究課題を掲げるとともに、虚構性や信仰心を排斥した文献実証主義のみを至上の研究方法とする(論文発表当時の)風潮への疑問を提示した論考でもある。

第一節の「鎌倉新仏教開祖の女性観——絶対平等の思想と女人救済——」は、一般読者向けの小稿でもあり、啓蒙的な論述に終始しているように思う向きもあろう。しかし、この小稿の根幹には、ジェンダー研究によって再燃した女人成仏往生論と、中世における祖師伝形成の問題とが横たわっている。ここ二十年ほどで、文学や歴史学・宗教学の分野において「女性」「女人」を対象とした研究は著しい発展を遂げた。その中でも、中世往生伝研究に携わる者の立場からは、中世の顕密仏教研究の視点から法然の女人往生論に言及した平雅行「旧仏教

と女性」(津田秀夫先生古希記念 封建社会と近代) 同朋社、平成元年所収。後に、『日本中世の社会と仏教』塙書房、平成四年に再収)と、平説を批判した阿部泰郎との論争(『女人禁制と推参』大隅和雄・西口順子編『巫と女神』シリーズ・女性と仏教四、平凡社、平成元年所収。後に、『湯屋の皇后 中世の性と聖なるもの』名古屋大学出版会、平成十年に再収)が興味深い。この論争の内容と経緯とは、遠藤一『中世日本の仏教とジェンダー 真宗教団・肉食夫帯の坊守史論』(明石書店、平成十九年)に詳しいので、氏の著述を参照願いたい。

本節では、日蓮の絶対平等の思想に基づく女人成仏論を中心に論を展開したが、要は、末世の衆生を普く平等に救済しようとした鎌倉新仏教の開祖たちが、門徒や女性信者の要請に応じて女人成仏・往生といった女人救済論を説くことがあり、その内容が仏典に記された変成男子や龍女成仏説であったとしても、それは、あくまでも難解難入の教義を平易に説くための方便や各論であって、凡愚の認識を持ち、大乘仏教による末世の衆生済度の任を自覚的に担った彼らにとつて、男女の性差は問題になるはずもなかったと考えられる(植木雅俊『仏教の中の男 女観——原始仏教から法華経に至るジェンダー平等の思想——』岩波書店、平成十六年参照)。無論、実証的記述に乏しい小稿の記述のみからそれを首肯することは難しいだろう。しかし、自らを『法華経』の行者と称した日蓮の遺文に変成男子説が見られないという事実から推察して、専修念仏を提唱した法然や、教学に秀でた鎌倉新仏教の開祖たちが、女人成仏往生論を特殊な教説と捉えていたとは考え難いのである。このことについては、今後、中世往生伝類における女人往生の記事や祖師伝形成の問題、鎌倉新仏教における女性への布教や宗義喧伝の問題と絡めて考察していこうと思う。

第二節の「西行と文覚——歌僧頓阿の眼に映った両者の邂逅——」は、隠遁賛美の時代思潮の中で形象された「歌聖西行」像を、後世の著名な歌人僧がどのように享受したかを推察した論考である。『西行物語』や『撰

『集抄』などに描かれた廻国の歌人僧西行は、極楽浄土を願生する人々が羨望した理想的な往生人である。しかも、『西行物語』や『撰集抄』は、往生伝の枠組みや様式を踏まえて形成された往生・結縁の書であった(本書第一節第一節参照)。

『井蛙抄』に掲載された高尾法華会での西行と文覚の邂逅譚は、簡潔な話展開ながらも、往時の人々が抱いていたであろう西行像を凝縮したかのような逸話である。この邂逅譚が事実であるか否かはともかくとして、そこには、西行を理想的な歌人僧と讃仰して止まぬ頓阿が、世に伝えたかった西行の姿があった。この話が他の文覚話と並んで『井蛙抄』に書き記されたことによつて、「歌聖西行」像は歌僧頓阿の西行への思いと共に再創出され、後世の人々に伝承されていくことになった。『井蛙抄』における西行話(文覚話)の撰取は、西行伝承(文覚伝承)の享受と再生産と捉えることも可能であり、往生人としての西行を根幹で支えるイメージの構築に寄与するところが少なくなかったと考えるのである。

如上、本書には、第四章第一節のように、十分な論拠を提示できないままに結論を先送りにした小論もある。しかし、何れの論考も、今後の中世往生伝の作品研究ならびにその成立背景を探るために、また、「往生」という視点から中世に成立した諸作品や宗教・文化を再照射するために無意味な取り組みではなかったと考えている。本朝における往生伝の編纂は、基本的には、中国唐時代以来の旧規に準じる伝統的な意識と様式とを逸脱することなく、平安時代から明治時代まで連続と続いた。無論、中世という時代に至つて往生伝の存在自体が忽焉として消えようはずもないのだが、「中世鎌倉期には往生伝そのものが存在しなかった」と主張する偏頗な研究によつて、中世往生伝は、長きにわたつてその存在を無視されてきた。本書は、法然浄土門の緇流の徒による往生

伝編纂の実態を究明することで、誤った認識でありながらも定説化されてきた中世往生伝の非有説に異議を唱え、その存在意義を文学史上・思想史上に明確に位置づけることを目的としている。また、本文の各所で論じたように、浄土往生思想を中軸に据えて著された中世の諸作品（絵伝や掛幅絵などを含む）を近代的な作品分類の狭小な枠組みから解き放ち、中世往生伝類という幅広い捉え方をするることによって、中世の人々が認識していた往生伝の実像が見えてくるのではないかと考えている。

このような試みが、はたして説得力を持つものか否か。暗中模索の状態で書いた各章には、重層的な論証をなし得ないままに次なる課題を残した論考も多い。本書の問題提起が、今後の本格的な中世往生伝研究へとつながることを願うのみである。